

「人をかたよりみないかた」 -使徒行伝講解説教 24-

使徒行伝 10章 34節～48節

説教 本庄侑子牧師

教会の歩みは主の福音を宣べ伝える伝道の歩みです。使徒行伝を読んでいると気づかされず。伝道とは、私たちの計画があって、それを推し進めることではありません。イエス様が聖霊において私たちの先を行き、人の罪を赦し、抱きしめておられる。そんなイエス様の姿に気づかされ、私たち自身のあり方が変えられ、イエス様がしておられることに従うようになっていく。それが教会の歩みとなり、伝道の歩みとなってきたのです。

ペテロは自分の計画になかった異邦人に福音を伝えました。ユダヤ人として、異邦人には関わらない生き方をしていたにもかかわらずです。しかもコルネリオは、当時ユダヤを支配していたローマ帝国の軍人でした。憎い存在だったはずです。

しかし、神さまは徹底してペテロの考えに向かってこられました。主の幻と聖霊の助けによって、ペテロは異邦人を避けてはいけないと示され、カイザリヤへと出向いて行くことになるのです。ペテロは丸一日歩いて行きました。神様の言葉に答えて歩み始めたものの、本当にこれでいいのだろうかと自分の内で問答していたらうことは想像に難くありません。そうしてたどり着いた先で、コルネリオが足下にひれ伏して御言葉を聴こうとする姿を目にするのです。

ペテロは言いました。「ほんとうによくわかってきました。」(35節) ペテロは教会の指導者の筆頭でした。福音を信じ、宣べ伝えてきました。しかし、この時、ようやく気づかされたのでしよう。自分は神様の心を全然分かっていなかったと。神様によって用いていただいて、ようやく分かってきたのです。

ペテロが自分の心の中にあつた壁を乗り越えられたのは、差別はいけないという道徳観や正義感ではなく、神様の働きゆえでした。神様の御業に巻き込まれて、やっと神様の御心が見えてきましたし、神様がこの人を救おうとしておられると分かってきたのです。

教会は何度も何度も思い起こして語ってきました。教会に新しい伝道の展開が起こったのは、私たち自身の心の壁が打ち砕かれ、御心に気づかされ、そこに従うようになったことを通してだった。自分たちの計画が先にあって、それを推し進めることでも、この人をつくり変えようとするところでもなかった。私たちの思いに先立

って、主がなさる出来事に召し出され、用いられて、そこで御心を知り、私たちが変えられて、主の伝道が進んだんだ。

私自身も、主の御業に巻き込まれ、自分の思いが砕かれたことがありました。自分が今、日本にいる。牧師である。これは神様の御力のゆえです。私はある理由から日本を後にし、まるで脱出するかのようにアメリカに渡りました。洗礼を受けましたが、家族、友人は私に対して好意的ではありませんでした。キリスト者になったことによって、孤独を感じるようになりしました。現実に変化なく、自分の言葉にも憎しみが満ちていました。渡米して言葉には大変さがありました。信仰的には非常に恵まれました。

アメリカでは日本人を避けていました。けれども、そこに主の導きがあり、日本人と再び交わる機会が与えられ、祈り合う時が与えられたのです。背を向けてきた日本、家族、友人。忘れたと思う一方、イエス様がそれらの人々を愛しておられることに気づかされるのです。この時に流した悔い改めの涙は忘れられません。

その中で私は、日本人教会に集うようになり。その後、とても神様の話を聞いてくれそうもない人々に対して集会をすることになります。意に反して大勢の人々が集まって来ました。人々は一緒に讃美をし、話を聞いて帰って行くのです。ある人は尋ねてきます。「さっきの言葉は聖書のどこにあるのですか？」と。神様の働きは確かにありました。

やがて、洗礼を受けたいと願い出る人すら与えられます。イエス様が日本人を愛しておられる。それまで、日本に対して背を向けてきた私は変えられていきました。その後、祈りの内に帰国することになりました。自分の思いになかった計画が神様によって与えられていたのです。イエス様は人を偏り見られるお方ではありません。全ての人を愛し、救われるお方です。

私たちもそれぞれに心の壁を作り、祈ることも忘れている人がいるかもしれません。しかし、教会の伝道は、そんな私たちが変えられることを通して大きく前進したのです。イエス様がしておられることに用いられ、御心を知り、従うようになったところで前進していきました。私たちが置かれているのも、この教会の歴史です。

(記 説教要約奉仕者)